特集　今、私たちにできること

続 殺処分「ゼロ」を目指して

私たちの生活を豊かにしてくれる動物たち。私たち人間にとってかけがえのない存在ですが、その動物たちが人間の身勝手な行動の犠牲にもなっています。人と動物が共生できる社会になるには何が必要でしょうか。殺処分される犬猫を減らすために、今、私たちにできることとは何でしょうか。飼い主が犬や猫の不妊手術を行い、望まれない妊娠を防ぐことは、行き場のない命を増やさないことに繋がります。また、野良猫など『飼い主のいない猫』に対してもできることがあります。行き場のない不幸な動物たちのために、今、私たちにできることとは。

環境省―犬・猫の殺処分数をゼロにするためのアクションプラン―

平成 24 年度、日本では 16 万頭を超える犬猫が殺処分されました。そこで環境省では平成 25 年 11 月に「人と動物が幸せに暮らす社会の実現プロジェクト」を立ち上げ、犬・猫の殺処分を減らし、最終的にゼロにすることを目指すための具体的な対策について、活動を行っている個人や関連団体等と協議を重ね検討を行ってきました。その結果、平成 26 年 6 月、犬・猫の殺処分数をゼロにするための取り組みをまとめたアクションプランを発表しました。アクションプランでは、国や自治体などの行政だけでなく、一般の飼い主や NPO、ボランティア、ペットショップなどの事業者等と幅広く連携し、動物愛護センターや保健所に収容される年間約 21 万頭にのぼる犬・猫を減らし、最終的にその 8 割近い犬猫の殺処分数ゼロを実現することを目指しています。

また、アクションプランでは、「飼い主・国民の意識向上」「引き取り数の削減」「返還と適正譲渡の推進」を 3 本柱に掲げ、飼い主や子どもたちへの適正飼育に関する教育の強化から、自治体の管轄区域を超えた広域譲渡の推進まで、幅広く活動を展開しますが、なかでも、殺処分されている動物の大部分を占める猫に関しては、室内飼育、不妊手術の徹底や地域猫対策の推進など、特に重点的に取り組んでいます。また、環境省では、自治体により抱えている問題点が異なることに着目し、今後は全国からモデル地域を複数選定し、各地域ごとに設定した課題に取り組むモデル事業を展開するとしています。そして、その活動と併行して、先の動物愛護管理法改正に際しての議論でも議題として取り上げられていたマイクロチップ装着の義務化や、ドイツのティアハイムなどを参考にした大規模シェルターの設置など、さまざまな懸案事項を検討しています。

望まれない命を増やさない！殺処分ゼロを目指し―不妊手術を―!!

殺処分される犬猫を減らすには、動物管理センターや保健所に収容される犬猫を減らすことが重要です。そのためには、無責任な飼い主をなくすことや飼い主の責任である適正な飼養管理、終生飼養等の徹底、安易に犬猫を買わない（飼わない）、遺棄の防止、飼い主のいない犬猫の対策の推進などが挙げられます。特に不妊手術は、不幸な命を生み出さないためにも重要ですが、不妊手術はかわいそうと飼い犬や猫に不妊手術をしない飼い主が多くいます。その結果、生まれてきた子犬や子猫、親犬や親猫までもが山に捨てられ飢え死にしたり、野生動物の餌になったり、道路に出て車に轢かれたり、川に流され溺死させられたりして、悲惨な最期を迎える犬猫が大勢います。また、不妊手術をすることは、望まない妊娠を防ぐだけでなく、もし、自分に余裕があれば行き場のない犬猫たちを飼ってあげることもできます。産まれて来なかった命の分、どこかで別な不幸な命を救うことができるのです。

昨年改正された動物愛護管理法では、自治体は、動物取扱業者から引取りを求められた場合の他、繰返し引取りを求められた場合やあらかじめ新たな飼い主を探す取り組みをしていない場合、犬猫の高齢化や病気等の飼養が困難であるとは認められない理由による場合等、終生飼養の趣旨に反する場合には引取りを拒否できることとされました。しかし、飼い主が高齢だから、急な転居や病気などの理由で、動物管理センターや保健所に犬猫が放棄され、新たな飼い主や引き取り手がない場合は殺処分されてしまいます。本来、ペットと言えども飼い主は命あるものに対する責任があるはずです。しかし、産まれてきた全ての命に責任を持つことは、生活環境や経済的にも並大抵のことではありません。贅沢はしなくても、我が子を育てるように愛情をかけ、必要な費用や世話をする時間や労力が必要です。

また、不妊手術は、子どもを産ませないようにするだけでなく、病気の予防、発情期の犬や猫のストレスをなくすという効果もあります。避妊も去勢もせず家に閉じ込めて、発情のストレスをかかえさせることは、犬猫にとって大変な負担となります。万が一、子どもが出来てしまったらどうしますか？　健康な身体にメスをいれるのは人間のエゴと言う人もいますが、果たしてそうでしょうか？それよりも、発情のストレスを我慢させて、子犬、子猫が産まれたからと捨てたり、動物管理センターや保健所へ連れて行く方が人間の怠慢とエゴだと思います。犬や猫にとって本当に可哀想な意味を考えて欲しいのです。それを考えてあげられるのは、飼い主なのです。

猫の飼い主さんご存知ですか

計画性のない猫の出産は、必ず母猫や生まれた子猫の不幸をつくり出します。猫は生後半年くらいで発情し、年に 2 ～ 3 回、平均 3 ～ 6 匹の子猫を産むことが可能です。1 匹のメスが、年 2 回、3 年間、3 匹の子猫を産み続けたと計算すると、18 匹の子猫が産まれます。更にその子猫が半年後に発情し、お産することを考えると途方もない数となるため、ねずみ算ならぬ猫算とまで言われています。平成 26 年初頭に札幌市動物管理センターに多頭放棄された 98 匹の猫たちも、僅か 2 ～ 3 年で膨大な数になりました。

猫の発情とは…

猫はある日突然、人間の赤ちゃんが泣くような声を出し、身をよじって仰向けになったり尻を高く上げたり頭をこすりつけてきたりします。このようないつもと違うふるまいは発情したことを示しています。この時、オスと出会って交尾を受け入れれば、交尾の刺激によって排卵しほぼ確実に妊娠します。このような状態は突然やってくるので、その場面に出くわして途方にくれる飼い主もいます。メス猫が発情すると、普段と違ってオス猫を求めて外出したがります。一度も屋外に出たことのない猫でも家人の出入りのちょっとしたすきに出てしまうことがあります。こうして無防備に屋外に出て、短時間に交尾を済ませ戻ってきます。飼い主が気づいた時には、すでに出産が間近な場合さえあります。猫によって、多少の違いはありますが、だいたい7～12ヵ月で初めての発情を迎え、定期的に年2～3回（春、夏、秋）発情し、特に、春と夏の発情は間隔が短いため、まだ子育て中にも関わらず、次の発情を迎え 2 回目の出産をしてしまったという場合も多くみられます。

一方、性成熟に達したオス猫は、自分の遺伝子(子孫)をなるべく多く残そうとする本能から、いたるところに尿をかけマーキングしたり、他のオス猫と喧嘩するようになります。マーキングも喧嘩による傷も飼い主の悩みのタネですが、不特定多数との喧嘩や交配は猫エイズに感染する確率を高め、寿命を短くします。オス猫の発情は定期的ではありませんが、メス猫の発情に誘われて起こります。オス猫は、発情したメス猫が近所にいればすぐにそれを察知して、メス猫にまとわりつきます。そのため、発情の時期にオス猫の家出が多くなります。そのまま帰って来なくなることも少なくありません。メス猫を探して放浪するようになり、家に居つかなくなってしまうこともあります。

また、不妊手術をしなかったせいで、もっとかわいそうな病気にかかる可能性が高くなります。 乳腺腫瘍の場合、犬では良性と悪性が半々で発生しますが、猫では90％以上が悪性です。その上、子宮蓄膿症の場合、犬より体が小さいので敗血症によるショックが出て重篤になりやすく、一歩間違えると命を落とすこともあります。

こういった重い病気も避妊手術を行っていれば、ほとんど予防できます。オス猫は高齢になるまで去勢手術しなかった場合、前立腺肥大になることも多く、猫の幸せを考えると、生後5～6ヵ月頃までに不妊手術を行うことが理想ですが、すでに成熟している猫の場合でも、なるべく早く避妊・去勢を行うことをお勧めします。

飼い主の中には、健康な身体にメスを入れることに抵抗を覚える人もいます。しかし、猫が人間社会でなるべくトラブルなく暮らすために、また猫がいろいろな病気にならないようにするために、そして何より不幸な子猫を増やさないようにするために、早い時期に不妊手術をすることが、猫と共に生活する飼い主の最低限の責任です。

不妊手術をすることで

●避妊手術　メス

- 望まない妊娠を防ぐ
- 乳腺腫瘍、子宮蓄膿症、卵巣腫瘍等の病気の予防
- 発情のストレスがなくなる
- 犬は出血がなくなる
- 猫は発情時の鳴き声が軽減される

●去勢手術　オス

- 精巣・肛門周辺の腫瘍、前立腺の病気、会陰ヘルニアの予防
- 犬は尿のマーキング行動が減る
- 猫は尿スプレー行動が抑えられる
- 攻撃性の低下、性格が穏やかになり、しつけもしやすくなる
- 発情のストレスがなくなる

※なお、避妊・去勢手術後は発情ストレスが減少するため肥満になりやすい傾向がありますので、食事管理と適切な運動が必要です。

参照：環境省・GaKKen ネコの病気百科・インターネット等のデータ、記事を参考にさせていただきました。